

てこな・ミュージーズ・ジャーナル

感動を俳句に

俳句は世界で一番短い詩

俳句は17音節からなる世界で一番短い詩です。そしてその中に日本人の美意識、自然観、哲学、思想、情趣といった様々なものが込められています。俳句には「有季定型」（季語を入れること、五七五という型があること）というルールがあります。これは、日本人が古来、四季の移ろいに心を寄せ、自然を愛で、万葉集の時代から和歌という定型詩を尊重して生きてきたということにも起因します。たった17文字に自分の思いをまとめるのですから、あれもこれも詰め込んでしまっただけでは何にもなりません。ほんのりかけら感動を五七五にまとめてみると鑑賞する相手の方には大きな広がりとなって伝わるものです。

季節の変化を楽しもう

日本は春夏秋冬、四季の富んだ国であります。さらには「立春」とか「清明」「白露」などの美しい言葉で示される「二十四節気」という暦もあります。一年365日を24等分して、季節が微妙に変化するのを暦として言葉を表現しています。四季に恵まれたこの国では、「二十四節気」によって、自然の再生循環と季節の移ろいを身体全体で感じ、自然と共生をしてきたのです。このように、季節に敏感になると毎日の生活が楽しくなります。通勤、通学の途中や出かけた時にふと見上げた街路樹も、季節によっては新しい芽が芽生え、青い葉が茂り、そして葉が色づいて散っていくのですが、これを毎日見ていると少しずつの変化に気づき自然の力を実感します。最初から、俳句を作ろうと力まないで、手始めに、毎日の生活の中で出会う季語、これは朝の食卓から、着ていくもの、外の景色、など季節の変化をポケットの手帳にメモしてみてください。そうしていくうちに、今まで漫然と見ていたものからの新しい発見が生まれてきます。

市川は俳句にゆかりの深いまち

ところで、市川市は万葉の昔から文学土壌の豊かなところですが、俳句の世界でも、江戸時代には芭蕉が深川の庵から船で小名木川をくだり、江戸川河畔の常夜灯から行徳を訪ね逗留したとの記録も残っていますので、行徳での作品は見当たらないも

市川市文化振興財団 副理事長・沖俳句会 主宰 能村研三



のの、死後行徳の俳人たちによって行徳の法善寺というお寺に句碑が建立されました。また松戸や流山に長く逗留していた一茶も江戸川を下り、真間山弘法寺にも訪れています。近代になってからも、子規や虚子も市川を訪れています。水原秋櫻子や富安風生はその代表作ともなるような作品を市川で作っていて、その句碑は真間山弘法寺の境内に建立されています。

梨咲くと葛飾の野はとのぐもり 水原秋櫻子
まさなる空よりしだれざくらかな 富安 風生
戦後も市川には、岸風三樓や柴田白葉女、能村登四郎、林翔、伊藤白潮などの多くの俳人が市川に住み、全国に作品を発表しました。

市川における俳句の取り組み

市川は昔から文芸に深いかわりのある町であることから、2000年から市川市では「市川を詠む」というテーマで「市川手児奈文学賞」を制定し、短歌、俳句、川柳の三部門で全国から作品を募集し、優秀な作品を表彰しております。また、それに合わせて、市内の小学校の授業に俳人が出向き、出前授業として俳句の面白さを体験してもらっています。

あなたの感動を俳句でつたえよう

市川は歴史的資産も多く、多くの文化人も市川を拠点として活躍したまちですから、もう一度足元から見直してみると魅力のある素敵なまちであることに気が付きます。お友達を連れだって、あるいは一人吟行でも結構ですから、そうした魅力あるスポットを訪ねて気軽な気持ちで俳句を作ってみてはいかがでしょうか。きっと今までに気が付かなかった新しい発見に出会うことができると思います。



富安風生 句碑
真間4-1-1 (弘法寺)
1970年(昭和45年)建立

まさなる空よりしだれざくらかな